

三保松原・マツ材線虫病被害の状況

— 微害傾向を維持 —



技術情報 VOL.3-3

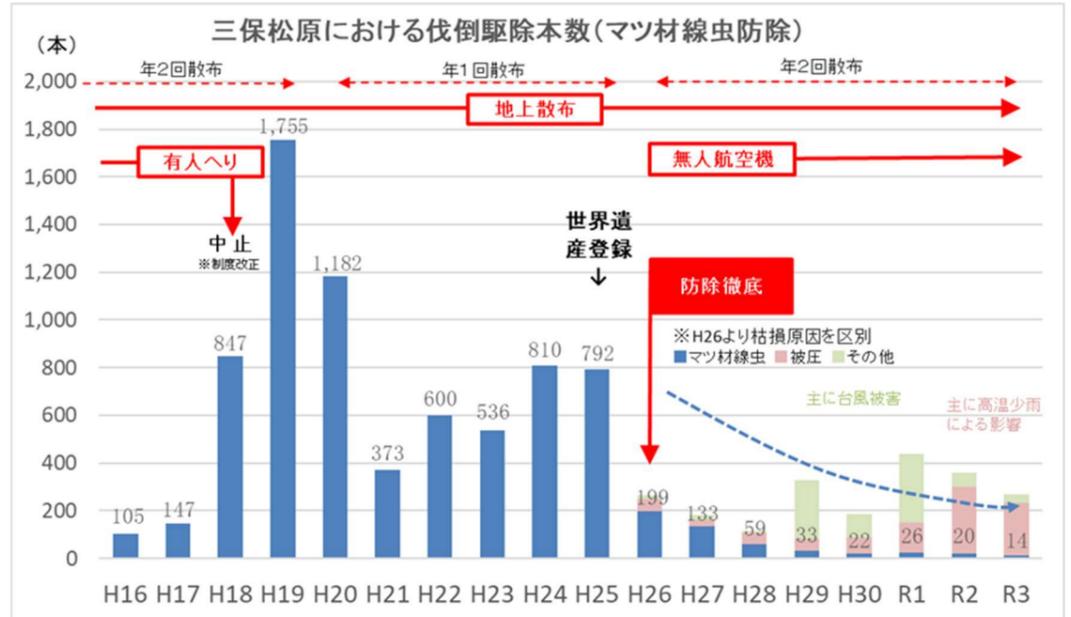
(調査・検証) 一般財団法人三保松原保全研究所 R4.5

●被害の背景・推移

マツ材線虫病は、“世界4大樹木病害”に数えられるマツに激烈な被害をもたらす伝染病であり、病原体のマツノザイセンチュウと媒介者のマツノマダラカミキリにより引き起こされる。

三保松原では半世紀以上前から発生が確認されており、15年程前は微害を維持していたが、平成18年度に有人ヘリによる薬剤散布区域を地上散布に切り替えたことで(制度改正による)、2年間で被害木が約12倍に激増した。

その後も高止まり状態が続いていたが、平成25年度の富士山世界文化遺産構成資産の登録を契機に防除が徹底され、再び微害化している。



◎近年の被害傾向

平成29年度に、防除目標値(1本/ha = 34本/年)以下を達成し、以降は微害を維持している。

近年特に被害が多かった半島北端及び南端も収束に向かっており、令和3年度は前年度比30%減(20本 → 14本)と微害化傾向を維持している。

ただし、三保半島内にはまだマツ材線虫病が残っており、半島南部の被害も外部から侵入の可能性が高いことから、油断せず徹底した防除を継続する必要がある。



マツノマダラカミキリの幼虫 カミキリの食痕 マツノザイセンチュウ

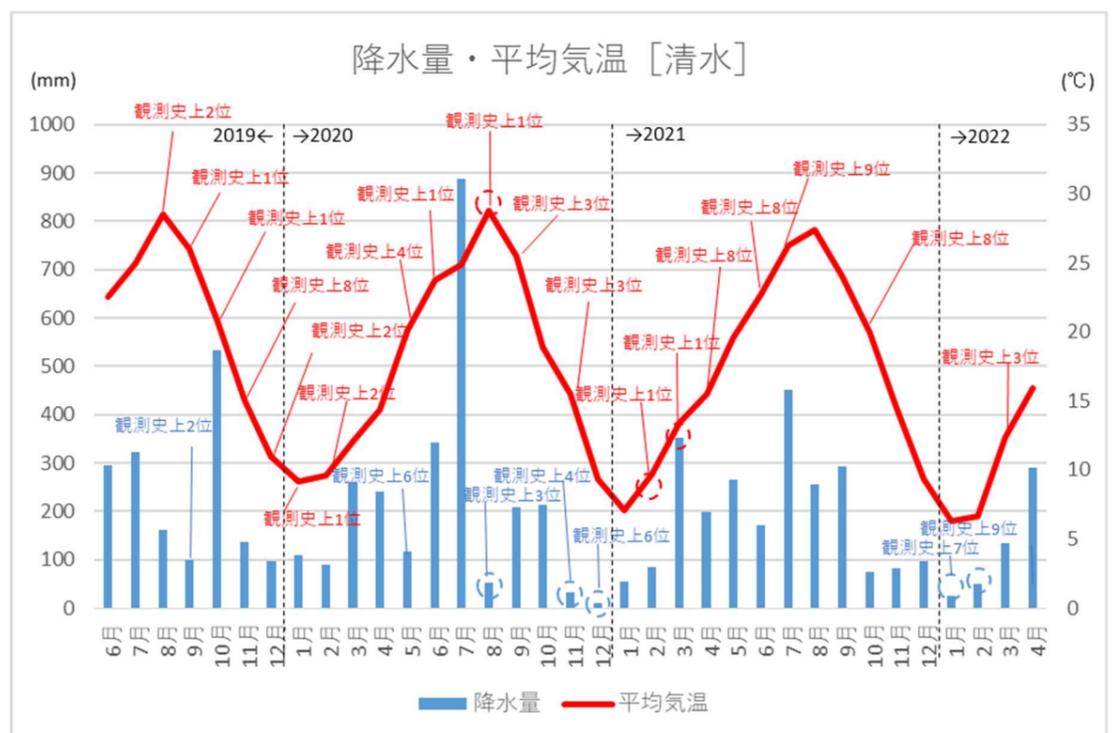
◎その他要因

令和元年～2年度の特異的な高温少雨により、衰弱枯死が多数発生した。これら枯死木も伐倒駆除が必要である。令和3年8月以降は平年並みの推移傾向である。

●被害の場所



マツ材線虫病被害発生位置図



※「観測史上○位」の標記は、平均気温は高さ、降水量は小ささを示す観測時点の順位

《参考》 県内の激害地の状況（令和2年12月撮影）



県内の激害地を見ると、マツ材線虫病を放置した場合はすぐに感染爆発が起こり、ほぼ3年でマツ林は壊滅状態となっている。写真は5年前に防除を取り止めた場所で、感染源となった左側のマツ林は既に朽木が立っているだけの状態である。被害は右側のマツ林に連鎖し続けており、今後どれほどの被害となるのか予想がつかない。

三保松原は微害化したが、突然激害化した平成18年度の前例もある。少しの防除の緩みが大きな被害に繋がるため、今後も緊張感を維持し、徹底した防除(被害木の調査・伐倒駆除、薬剤散布等)を実施していく必要がある。